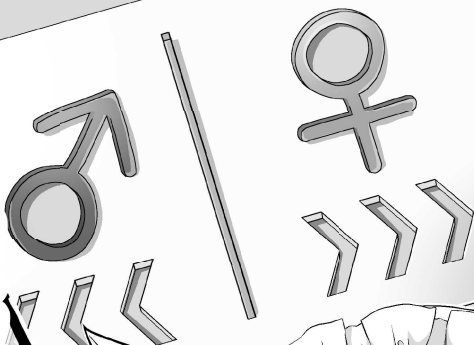


「さて、トイレに行っていないのじゃ。

トイレはここを出て左じゃよ。あと……

入り口は右側
を選ぶようにするにの♪



女が特徴的な狐耳に九つのもふもふ尻尾を時折揺らし、大きな胸は何かする度に揺れる。巫女服を纏ってもなお身体のラインは浮き出ており、大人のオンナを漂わせる美貌に男なら誰もが振り向き、その身体付きにゴクリと息を飲むだろう。

女……妖狐は壁時計を見た。あの子がトイレに行つてから何分経つただろうか？ 随分とお楽しみのようだ。クスツと笑うと、扉がゆつくりと開いて……小さな少女が入ってくるではないか。

少女の身体は妖狐と比べると、一回りも二回りも小さい。十にも満たぬ年相応の背丈。年相応の身体付き。だが狐耳と一本の尻尾は妖狐と褐色がない程、もふもふでふつかふかで身体を動かすたびに、ふさつと音を立てる。

可愛らしい白と黒を基調としたメイド服がよく似合う。走つてきたのか、それともナニがあつたのか？ はあはあと可愛らしい息を吐きながら汗を拭い、顔を伏せながら……ゆつくりと妖狐の元へ近づくその足取りはどこか妙だ。まるで慣れていないような、腰が抜けて歩く事すらままならないような。オマケに服も着崩れている。

「随分と長かつたのう。きちんと右側の扉に入ったかえ？ えらいえらいなのじゃ♡」
「……うるさい」

ぶすつ。とした表情に、見た目に似合わぬ乱暴な言葉遣い。女の子が無理して、男言葉を使おうとしているようにしか聞こえない。妖狐と少女の関係は何なのか？ 何故二人はこんな所にいるのか？ それは一時間ほど前に遡る……。

金色で、チクタクと小刻みな音を鳴らす大きな置き時計。棚に置かれたワイン一つ一つも高級品で専門家が見たら唸るようなラインナップ。様々なギャンブルに対応した台座や道具の素材にも拘っており、VTRルームと書かれた一室が伊達では無いという事を知らしめる。そこで……一人の男と、妖狐が言葉を交わしていた。

「借金五百万を背負い、金銭は無い。との事じゃの？ 負けたらどうなるかわかっておるかえ？」

「ああ」

「ふむ……ではレートの説明「全身賭ける」……ほう」

男はボサボサな髪の毛に無精髭を生やし、ポロポロな普段着に身を纏い、数日風呂にも入っていないだろう。年は三十と聞かすが、その見た目もありかなり年上にも見える。とてもじゃないが、VTRルームと書かれるこの部屋にふさわしい人物とは言えない。

そんな妖狐の狐耳が、ぴくつ。と反応した。金が無い者が賭けるのはそう……カラダ。身体をチップに代わりにしギャンブルを行うのだ。当然返せなければ待っているのは……？

男……彼はカジノで働く魔物娘の店員達を思い浮かべた。皆が皆、扇情的な衣類に身を纏いディーラーとして客とギャンブルし、時にはバーのように応対し、時には奥のプレイルームと書かれた部屋へ共に向かう。

そんな彼女達の殆どが元人間。身体を賭けたVTRルームでの戦いに負け、抱えた借金を返す為に働くのだ。当然ながら殆どが元男。今日も魔物娘として生き地獄に近い身で働き、いつ終わるかわからない借金地獄を味わっているのだ。

妖狐が部屋の左壁をチラリと見る。それに合わせて彼の首も動いた。そこには『頭部五百万』といった身体の部位を示す文字と金額が記されている。ひい、ふう。と壁を指差しながら小さく呟く妖狐に、彼は静かに待つ。

「ではチップを貸すのじゃ、三千万じゃの」

「……」

大きく、重たいチップ。ただこれはあくまで借り物。これを最終的に三千五百万まで増やさないといけない。勝てば普通の生活に戻る。こんなギャンブルをもう二度としなくてもいい、ただし負ければ……あちら側の世界へ、それは絶対にイヤだ。彼はチップを強く握りしめた。

「(親が残した借金の為にギャンブル……本当に気の毒じゃ)」

妖狐はVIPルームに来る人間の過去を調べるのが好きだ。だから、彼の事も調査済。殆どが自ら借金地獄に墮ち、ヤケクソ気味にここに来るが……彼のようなケースは稀だ。だからこそ同情もしている。

「(マサ・ササキ。年は三十。母が病死し、父はギャンブルに明け暮れ借金を残しどこかに蒸発。日雇いで何とか食いつないできたが金利だけで生活崩壊しかけ、こうして妾の元へ来てしまうハメになった。勝たせてやりたい気持ちはあるのじゃが……妾も生活がかかっておるからの)」

静かに妖狐がトランプをシャッフルする。プレイするゲームは『ブラックジャック』。♠になるようにトランプの数值を調整する。いたって単純なギャンブル。

「では、始めるかの」

彼は大きく深呼吸し、息を吐いた。妖狐のカードが一枚オープンされゲームがスタートする。

「俺は絶対に負けない」

果たして彼の運命は――。

「次はいくら賭けるかえ？」

「ぐっ……ぐっ……ぐっ……！」

歯を強く噛む。ギリギリと歯ぎしりを鳴らす。拳を握りしめる。汗が強く滲む。台を叩く。ドン！ と音が部屋に木霊する。静寂に包まれた部屋の外から「よっしやー！」と男性客の喜ぶ声が聞こえた。

対照的に、彼は顔を上げる事が出来ない。ひたすら俯き、プルプルと拳を振るわせる。そんな姿を無表情で見つめ、静かにカードをシャッフルする妖狐の姿。

「残り……五百」

あつという間に二千五百万という大金が吹き飛んだ。一時間も持っていないのではないだろうか？ このままでは彼もあの店員達の仲間入りを果たす事になる。

「……だ」

「む？」

「トイレだ。少し休憩したい」

「了解したのじゃ。と言いたい所なのじゃが……逃走防止に、一度精算する必要があるのじゃ」

「せい、さん？」

「お主が使い切った二千五百万ぶん、身体で払ってもらおう事になるのじゃ。なあに、次勝てば戻れるのじゃ」

そういう問題じゃない、それならトイレに行かずゲームを続行する。そう言おうと思ったのに、細く繊細な指を三本、彼の頭部にピタッと合わせ何かを呟いた。

「や、やめ——」

願いむなしく、彼の身体が金色のオーラのようなモノに包まれ、ごきつ。と自分の骨が軋み反動で胸を突き出すような姿勢を取るように、身体が自然と動く。この店員達の末路……それに、彼は成り果てようとして……。まだチップはあるから、完全に死んだ訳ではないのに、彼の心は絶望に陥る。

全身が圧縮されていくように身長が急激に下がっていく。同時に肩幅が縮み、なで肩になり……胸が膨らんでいく。その形は妖狐と比べるとあまりにも小さい。しかし服を押し上げつつも自己主張し、食いつく男は食いつくに違いないだろう。

日雇いで鍛えた筋肉が急激に衰え、日焼けした皮膚も徐々に白く、細くなっていく。両指もゴツゴツしたもので……ほっそりとしたものへ。毛も抜け落ち、妖狐よりも若々しく美しい腕だ。

「あぁっ……あぁっ……」

地面の踏ん張り方が変化していく。足を開け気味にしつつ踏ん張っていたものが、内股へ……両膝同士を合わせながら、太ももが……足首が十歳前後の成長期の少女の肉付きへ変化していった。細く、白く、毛一本無いその両足は、発展途上ながらも『女性』を主張し魅力的だ。

股間に衝撃が走った。それは彼女の下腹部へと広がっていく。慌てて触ると、棒が小さくなっていくのに対し彼の下腹部に風船のようなものが、大きく大きく膨らんでいく。熱を籠もらせたそれは、まるで射精を体内でしているような衝撃。

顔が、何かを混ぜられるような感覚に陥る。目が、鼻が、耳が。あらゆる所がねじ曲げられ、顔を押さつつ衝撃が収まるよう願うも、何も起こらない。

目が『可愛らしく』ぱっちりと開く。鼻が小さくなっていく。口が小さくなり、虫歯ができていた歯すらも綺麗に整われ……黒の髪の毛が根元が金色へ変化し色鮮やかで、女性らしくサラサラになり腰まで長くなっていき……全てが終わったかに思われた。

ここで働く店員は皆、魔物娘。だから彼も例外ではなかった……待ち受けているのは――。

耳が疼き、その疼きは頭頂部へと徐々に移っていく。顔の左右の器官が頭頂部へ移動する異常現象に目を見開き、苦痛の声を漏らす。

ぴよこつ。と音を立てるかのように「彼女」のケモミミが花を咲かせた。もつふもふで、髪の毛と同じ金色で大きくて無意識のうちにピコピコと揺れる可愛らしい狐耳。

尾てい骨が疼いた。身体が細身なのに、それなりの大きさを持った尻は、元気な子を産める証なのだろうか。そんな尻を突き出す姿勢を取ると、徐々に内側から新たな器官が突き破るように生え、それは耳と同じようにもふもふで、ふかふかで後頭部まで伸びる程の大きさを持った尻尾……。

己の生えた新たな器官が、徐々に鮮明に見えてくる。悪くなった視力が急激に回復していくと同時に、暗めの部屋が明るく見えるのだ。彼女の瞳孔が縦に割れ、夜目に優れる獣の目。

「そ、そんな……」

そんな彼女の声はもはや高く、妖狐と同じ女性のハスキーボイスに染まっていた。妖美な声……とはならず子供っぽい印象を与える声。

最後に彼の服が一瞬で変化し、その衣類は見たことがある。白と黒の基調でよく使用人が着ているメイド服。可愛らしいエプロンに、丁寧に尻尾を通す穴すら作られた可愛らしい衣装。

股間周りを締め付ける小さな下着の感覚に、彼女はすべすべの両足をすり合わせながら両手で触れ、違和感を無くそうとした。だが……そこにあつた相棒はもう無い。だからピッチリ張り付いた下着をどうこうする手は無い。その下着の感覚が、彼女にとって当たり前の感覚なのだから。

